

学校をつくろう！通信



珊瑚舎スコール

第155号

学校の役割 その132

前号でカリキュラム(日程表や時間割など)の持つ不自然さ、無機的な側面について触れました。

教育評論家の故村田栄一さんは、もう随分以前のことになりますが、シンポジウムで一緒した際、時間割の不自由さを指摘していました。「学校から時間割をなくしたい」そう、おっしゃっていました。時間割が授業中の生徒の興味や関心の持続を遮断し、連続性のない別の授業が始まってしまうからだと思います。また、元文科省事務次官の前川喜平さんは「珊瑚舎スコールはフリースクールというより、ここは殆ど学校法人だと思います」とコメントしたことがあります。独自のクラス編成とカリキュラム、時間割で運営されているからでしょう。

ちょっと的外れのようなことと思われるかもしれませんが、相撲の仕切りには「制限時間一杯」がかつてはありませんでした。双方の力士の呼吸が合えば何時立ってもいいものでした。一回の仕切りで立つこともあれば、立ち合いの呼吸が合うまで1時間以上も仕切りを繰り返したこともあったそうです。

「制限時間一杯」はラジオの相撲中継の開始とともに導入されたものです。放送時間内に結びの一番の勝負が決まらなければならなかったのです。「制限時間一杯」はラジオの時間割に合わせたものです。

相撲の「制限時間一杯」に限らず、人は人の都合で流れゆく時に区切りをつけました。時間の誕生です。ぼくは「珊瑚舎スコールはフリースクールではなく無認可学校と言う方が正確です」と度々言っています。理由は独自の学校観を具現化したカリキュラムをもとに時間割や日程表さらにスタッフ、講師、施設などの諸々が具体化され、その上で運営されているからです。現行の学校制度を規定する法令

等の枠の中には納まらないので、自負としての無認可を冠にしています。ただ、高等部は大学等入学資格付与校の高等専修学校として認可されていますから、無認可学校の冠を2021年度からは被れなくなりました。しかし、全校生徒40名で認可される沖縄の高等専修学校文化教養分野・珊瑚舎スコール高等部は法令等の枠の中にありますが、無認可イズムを踏襲した認可校だと思っています。

人は生命に備わった体内時計のハイ・ハイブリッド型、脳時計(時の流れに人為的な区切りを入れたこと)をいつから持つようになったのでしょうか。この多様な脳時計が文明の揺籃たる重要な要素の一つであることは紛れもないことでしょう。

その区切られた時間は与えられたもの、つまり他律的なものではなく自律的なものでなくてはなりません。例えば珊瑚舎スコール高等部の時間割、一コマ80分以内は生徒、教員(講師)が自律的に利用するものでなくてはならないと思っています。その自律性がゲストとしての教材の価値を左右します。さらにその連続性を前期と後期、さらに1年度、さらに就学期間(3年以上)で区切っています。

その時間は教科・科目など多様な場(空)の誕生に繋がります。つまり時間割を時空という視点でとらえるという大切な視点が見えてきます。教員(スタッフ)は自身の関わった授業という片隅からしか時間割という統合された時空を覗くことができません。生徒という立場だけが学校の中核である時間割という時空の体験者だ！ということです。(今のキッズスコールのように生徒数の少ない場合はそれが偶々可能になる場合もあります)大先輩の言葉に異を唱えることにはなりますが村田栄一さんにはこの視点が欠落していたと僕は思っています。

珊瑚舎スコーレは多彩な講師にそれぞれの授業を担当して頂いています。様々な個性の大人との出会いが生徒の体験を豊かなものにしてくれると考えています。時間割の視点で言えば生徒の時空体験の一翼を担っていただいている方々です。教員にはこの体験を生徒と共有する視点をもつことが必要です。例えば、授業検討会の充実、自己評価ノートの教員からの問いかけとメッセージなどにその視点を盛り込むことができると思っています。生徒銘々が書いた自己評価ノートを生徒同士が「学びの体験」の共有を模索する場が前期の「まにまに祭」と後期の「うりづん庭」の準備期間とそれぞれの発表です。

卒業生はそれらの体験を統合した「文章による自画像と朗読」が卒業要件として位置づけられています。中等部は「あの時かもしれない」を書き、朗読することになっています。

卒業制作の「文章による自画像」と「あの時かもしれない」は日本語科の授業で取り組むことになっていますが、日本語科の授業の枠で括るものではなく「カリキュラムと時間割」の時空体験から「今、ここにいる自己」を綴ることと朗読がその目的です。カリキュラムや時間割などは教員が準備しているものです。その役割は生徒の変容に寄り添うためにあります。そこには必ず教員の意図があります。それは「個の尊重と協同の調和」を大切にする人になってほしいという願いです。しかし、生徒個々が持つリアリティー(自他認識)が優先されることを最も大切にしなければなりません。

僕がそのために常に考えていることは「巧まざる効果」を生む時空作りです。教員は授業計画を立てます。その通りの授業ができることを良しとする傾向があります。教員の意図通りではその教員を超えるような生徒は生まれないでしょう。教員の意図を超えた、つまり教員の考える世界観(生徒観、教材観など)を凌駕するような時空を生徒とともに作ること、心躍るような時間のはずです。(ほ)

がじゅまる しんかめちゃー



(生徒・学生のコーナーです)

4年ぶり 馬天ハーリー大会開催！

*コロナ禍を経て、ようやく地域の行事、馬天ハーリー大会が開催されました。地元の掲示板にカラフルな「馬天ハーリー大会！6月26日(日)午後1時開会」という案内表示を見るたび、生徒達とワクワクが抑えられませんでした。これまで自主ハーリー大会を企画した生徒達でした。今年こそは優勝を！と勢いこみましたが、結果は2位でした。でも表彰状には「2位」ではなく「準優勝」と書かれていました。今年はどうな年になったのでしょうか。生徒の声を紹介します。

「ハーリー大会」

高等部3年 山川 虎雅

4年ぶりにハーリーがやってきた。僕にとって楽しく熱く盛り上がる日。

珊瑚舎には6月に毎年ハーリー大会が学校行事に組み込まれている。最初は小学校の時にやったちょっとだけ練習してみんなで楽しく体験して終わり。そう言うハーリーだと思っていた。でも5年前、中等部1年の時、初めて珊瑚舎のハーリーをやってみて僕が知ってるハーリーじゃなかった。高等部や講師の熱い熱意や、OB達の気合の入った声に懼さばき、舵取りしているタケチャンの「合わせろ！」の掛け声や山入端さんの「はい！もう一周」の掛け声。練習も土日入っていて、これは大人の部で見た本気のハーリーだと思った。1年の時は台風で馬天ハーリーは中

止になり2年の時初めて馬天ハーリーを体験した。珊瑚舎は毎年2位でその壁を越えられなかった。だから今年こそは1位を取る、そういう想いで馬天ハーリーに参加していた。

その時の馬天ハーリーも印象的だった。珊瑚舎は少人数の応援隊のはずなのに、大人数いるような魂から出してる声援。筋肉モリモリのイカつい相手。絶対王者の流星軍。心と体が熱くなるようなイベントだった。ハーリーが始まり女子の部の天丸(ティマル)は優勝し、一般の部では、珊瑚舎のチームが一艘決勝に勝ち進んだ。チームは高等部やOB、講師の中、中等部で1人だけ漕ぎ手で自分も乗っていた。決勝が始まりものすごい大きな声援。息のあった櫂。ターン前まで勢いのあった珊瑚舎がターン後少しペースが落ちたあと、1秒か2秒の差で流星軍に負けた。悔しい。次は絶対勝つ。その思いを残して初めてのハーリー大会は終わった。

あれから台風やコロナで中止になり、今年4年ぶりに馬天ハーリーが開催された。毎年参加していたOBのほとんどは海外や県外にいて参加できなかったり、在校生が多くて講師やゆい塾の人が本番に出られなかったり、4年前にあった熱意を持った在校生は少なかった。色々変わっていた。だから前の動画を見たり、朝体幹をしたりした。陸練習が始まったら経験者が初めての人に教えたりしていった。

練習が台風で無くなったりして、例年よりも練習期間が少なかった。けれどハーリーの練習中、漁業組合長の山入端さんや息子のコウタさんに漕ぎ方を教わったり、馬天ハーリーの前に高三メンバーは、授業の一環で奥武島(オウジマ)ハーリーを見に行き、ガチのハーリーを見てやる気が出たり漕ぎ方を見て研究していた。

OBの中でハーリーに物凄い熱を持った人がいた。けれど今回のハーリーには参加できなかった。今年参加したOBのオオケイとがんまりの古民家移築をしたエレキはその人の思いを持って1位を取りに来た。僕も練習を重ねる度に今年最後のハーリーと言う想いが強くなっていった。今回参加する人たちそれぞれがそれぞれのやり方でやる気や体力をつけたり、気持ちを整えたりして本番に備えた。

迎えた本番予選はタイムレースで自分達のチーム風丸(カヅマル)は風が1番当たらない応援側の方だった。予選のタイムレースで風丸は2分5秒で2位になり流星軍は2分2秒で1位になって決勝に上がった。他の珊瑚舎チームは女子の部の天丸は優勝し、今年初めて小学生の部で出たキッズ・初等部チーム星丸(フマル)は1位になったと放送があり応援してた生徒や保護者みんな喜んでくれたけど、もう一度聞いたら2位だった。波丸は予選のタイムレースで残念ながら落ちてしまった。

決勝が始まって珊瑚舎は予選の時よりも2秒早くタイムを縮め、今年の珊瑚舎最高記録を出した。けれど流星軍はそれを上回り7秒差もつけて優勝した。悔しかった。でも決勝が終わってサバニを降りた後、一緒に漕いでたメンバーや鐘の人がめっちゃ悔しがっているのを見て皆んな同じくらい本気だったんだって思って嬉しかった。

今年も優勝出来なかったけれどハーリーは色々変わっても皆んなの勝つ熱意や合わせて漕ぐ一体感、勝った時の喜びや負けた時の悔しさは変わらない。むしろ前回は上回るハーリーだった。やっぱりハーリーは楽しいな！



キッズ・初等部チーム「星丸(フマル)」



女子チーム「天丸（ティマル）」



一般の部「波丸」



一般の部「風丸」

ん親子は、真栄平区民とアイヌの交流を願って慰霊祭を続けようと活動されています。

沖縄と北海道、戦争体験者と非体験者をつなぐ思いを玉城さんたちから聞きました。

生徒たちは平和の礎の見学、「花はどこへ行った」「コシシケレリアフリカ」の合唱、「今日の1枚」にも取り組みました(当日の詳細、写真は珊瑚舎のホームページのコラムにありますので、ぜひご覧ください)。

生徒の感想を紹介します。



「慰霊の日の感想」

高等部3年 横川 天南

珊瑚舎に通って約1年、沖縄戦についてたくさんの授業を受けてきた。でも私にはずっと、平和学習に対して感じているモヤモヤがある。

そもそも私は沖縄戦を、知りたい、感じたい、思うことができないのだ。沖縄戦を学ぶのは、とてもしんどい。

私たちに沖縄戦について授業をして下さる方々は、心にゆるぎない情熱を持っていた。だから授業を受けている間は、私も熱い気持ちになる。でもそれは私自身の情熱ではなくて、独りになると失われてしまった。珊瑚舎の学生であるからには真剣に取り組まないといけない、とかいう盲目的な義務感はプレッシャーになるだけだったし、そんなふわふわした動機では、とても平和学習のストレスには耐えられなかった。また今まで、そうしないと犠牲者に失礼にあたるような気がして、力んで痛がったり悲しんだりしているところがあったが、自分も辛くなったからと言って“えらい”わけはない。私はいったい何を目指したらいいのだろう…。

そうしたことから私は、“どうして沖縄戦を学ぶのか”を、今年の慰霊の日のテーマにすることにした。この答えがないと私の心は、沖縄戦をブロックしてしまう。6月の慰霊の日、ずっとこの問いを意識して過ごした。そして一応、自分なりの答えが見つかった。

慰霊の日 特別授業（フィールドワーク編）

今年は糸満市真栄平と摩文仁の平和祈念公園へのフィールドワークを行いました。真栄平には「南北之塔」という慰霊塔があります。沖縄戦に従軍して犠牲となった北海道から沖縄までの兵士、そして沖縄の住民への慰霊の意味が込められています。沖縄県民を除くと沖縄戦で最も多くの戦死者を出したのは北海道です。

アイヌをルーツに持つ玉城美優亀さん・寿明さ

戦争を経験していない私はどこか、戦争は愚かな過去の出来事だと思って生きている。でもそれは間違いだ。台湾有事が起これば、沖縄も戦場になる可能性があると感じたとき、戦争は繰り返されると今さらながら意識して、呆然とした。残酷な戦争がいきなり身近に感じられて怖かった。私が社会に対して抱いている安心感は、無知ゆえの幻想にすぎないんだと感じた。信じたくないけれど世の中では、お金のことしか考えられないようなとんでもない人間が政権を握る。また、南北之塔でお話をしてくれた玉城さんは、身近なところに戦争は潜んでいるとおっしゃった。確かにそうだと思った。自分を見つめてみると、平和を乱す思考・感情がひしめきあっている。これらも小さな戦争なんだと考えると、人が戦争をやめることは絶対に不可能だと思ってしまう。

私はそんなこの世界で、平和へと舵をきり続けられる人でありたい。知らず知らずのうちに戦争に加担しないでいたい。自分をそんな強くて優しい人に育てるために、学び続けようと思った。これは私の情熱だと思う。

また、どう学んでいくべきだろうか。米軍基地への抗議活動で、涙を流して語る人たちの映像を見た。その涙がどこから来るのか？その熱はどこから来るのか？分かった気になることはできるけれど、心で感じられない。まだ、沖縄を自分の土地として捉えきれない、貧しい想像力の中に私はいる。知識と身軽い想像力をもって、素直に、沖縄の人々の存在を、生命を感じてみたい。まずはそこからだ。



真栄平「南北之塔」慰霊碑にて玉城さん達の話をお聞きしました。



お話の後、皆で「花はどこへいった」他、歌を歌いました。

今年も遊んだ！

エコネット美キャンプ

7月6日・7日の2日間、キッズと初等部のメンバーで名護市嘉陽にある「エコネット・美(フェア)」のキャンプに行ってきました。薪拾い、薪割り、火おこしやごはんづくりなど、自分たちの手で暮らしを立てる2日間です。中等部や高等部の生徒たちがいない場だからこそ、いつも以上に自分たちでじんぶんを使い手を動かすこととなります。頭をひねって何とか火をつけたり、力をあわせて重たいものを運んだりしていました。

「滝に飛び込みたい」「川でエビをとりたい」「海でシュノーケルしたい」「ムーチーをつくって食べたい」「夜の川探検をしたい」。生徒たちのやってみたくてやれるだけ詰め込んで、思い切り遊びました。シュノーケルで見た色とりどりの魚、飛び込んだ川の冷たさとドキドキした気持ち、暗闇でライトを照らすとぎょろっと光るエビの目や、念願のムーチーの味など、楽しかったことは特に強く五感で刻まれているようです。すべてを受けとめてくれるヌーファの自然の懐の深さと、優しいまなざしで生徒たちに寄り添ってくれるスタッフのみなさんに感謝しています。キッズや初等部のみんながどんな2日間を過ごしたのか、感想を読んでください。

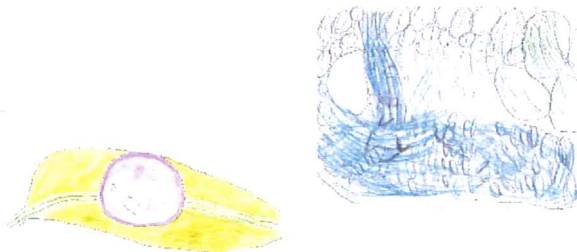
初等部 比嘉 美咲

シュノーケリングであるていどふかい所に来たら、岩のすきまに大きい魚がのぞいていて、その上にさんごと、小さい魚がおよいで、「かわいいなー。」と思っていたとどうじにさむすぎて、たい場した。



キッズスコーレ すみた あお

川にいったとき、おおきなえびをつかまえたいとおもったけど、おおきなえびわつかまえられなかったけど、ちいさなえびわつかまえられた。けどちがうえびにかまれた。 (*そのまま記載しています)



キッズスコーレ ひが たつき

ムーチャーがおいしかった。もちもちでさいこうだった。「きれいなむらさきだなあー」
おやつの中かで一番たのしみにしてたムーチャー。いっしょうたべられるムーチャー。

初等部 須田 あかり

2日目になって、今日帰らなきゃいけないんだと思いつつながら朝ごはんを食べた。悲しかったけど、ごはんはおいしかった。2日目の朝ごはんは、いのししの油みそごはんとかパイナップルとニンジンのおかげでゆしどうふのトマトスープとくき野菜(里芋に似ている沖縄在来種)のおひたしだった。おいしかった。ごはんを食べ終わったら川に行った。そのあと海にもいった。川でえびを2ひきつかまえた。でも最後にながした。海では波にゆられてふわんとした。おもしろかった。そしてむーちーを食べながらふり返りをして、帰りたけれど帰りたくないと思いつつながら帰った。帰りのバスではクーラーがきいていて、最高だなど

思いながらねた。つかれていたから気持ちよかった。



朝食用にパイナップル採り



食事支度も風呂も全て薪!



ふくぎのふぁー



(講師・スタッフのコーナーです)

「アジアを身近に感じてほしい！」

高等部3年東アジア講座担当 沖本 裕司

今年の四月から高3の東アジア講座を担当しています。スタッフの松田さんからお話を頂いた時には、高校生を相手に講座を持って一年間一緒に学ぶことができたりやりがいがあるなという気持ちと共に、学生に教えるという経験がないため授業をすることが出来るだろうかという不安がありました。けれど、せつ

かくのチャンスなのだからベストを尽くそうと決めました。

学校が那覇市にあったとき、韓国の小中高生との交流で通訳兼ガイドとして、与儀の校舎を訪れたことが数度ありました。丁寧に時間を割いて交流の場を持っていた先生方、言葉は分からなくても歌やゲームでのびのびと他国の学生と交流を進める生徒たちの姿に感動を覚えました。このときの印象が珊瑚舎スコールのイメージになっています。今回の東アジア講座の受講生の一人、タイガ君もその時の生徒の一人でした。もう何年も前のことなのにお互い覚えていました。

まとまったテキストが見当たらない中、やる限りは最善を尽くそうと独自に、授業計画の作成にとりかかりました。中心テーマは「私とアジア」というところに集約されます。アジアの中の沖縄という立場から、様々な問題を切り口にしたアプローチを通して、アジアを身近に感じることができるようになることです。

先日、前期15回の講座が終了しました。簡略、以下のようなテーマでした。

第1回 私とアジア。

第2回 沖縄とアジア。

第3回 台風とアジア。

第4回 さつまいもとアジア。

第5・10回 沖縄に暮らすアジアの人々(台湾)。

第6回 アジアのできごと(5月)日本国憲法・ノモンハン事件・アッツ島玉砕など。

第7~8回 県民のアジアでの戦争体験。沖縄出身兵の中国・満州での戦争体験。

第9回 アジアのできごと(6月)靖国神社・天安門事件・花岡事件など。

第11~13回 県民の戦争体験(住民)。サイパン・テニアン・フィリピンなど。

第14回 アジアのできごと(7月)モンゴル独立・盧溝橋事件・フィリピン独立など。

後期では、アジアの事柄がいつそう身近に感じられるような講座にしていきたいと思います。具体的には、「沖縄に暮らすアジアの人々」シリーズに毎月、韓国 or 中国の方に来ていただく、「アジアのでき

ごと」シリーズについて、もっと生徒自身が時間を取って調査・研究・発表できるようにする、「県民のアジアにおける戦争体験」シリーズは定期的に、沖縄県民の兵士あるいは住民としての過酷な戦争体験に向かい合う、さらに、東アジアの漢字文化、万国津梁の銘文、やきものとアジア、東シナ海の小さな島々などのテーマを取り上げたいと思っています。批評や助言を頂ければ幸いです。

現実のアジアの世界は複雑で難しいですが、高校生自身が社会の自覚的な担い手として、自分の目と耳と頭で冷静に考える力を身につけることが私の願いです。

スタッフ紹介



キッズスコール(小学校1~3年生)担当

西山 哲平

4月から珊瑚舎の事務局スタッフとしてキッズスコール担当になった西山哲平です。生まれは熊本、小学校5年生までは京都、その後は大学まで北海道で過ごしました。日本を北上しながら育ったわけですが、縁あって今では家族と沖縄で暮らしています。3月まで公立の小学校の教員として働き、八重山と読谷で合わせて5校、19年間勤務しました。

山がんまりでキッズ4人とすごす中で、珊瑚舎特有の授業の時間や感覚を味わっています。公立の小学校では30人を一人で担当していました。そのせいか、キッズスコールの授業では時間がとてもゆっくり流れているように感じています。これまでは人数や時間の制約に縛られる中で生徒をこちら側に合わせる場面が多かったです。珊瑚舎では生徒やスタッフと相談して授業や時間の枠組を柔軟に変更したり、一人ひとりに関わる時間が大幅に増えたりしています。

山がんまりですごしていると、いろいろな時間に鳥の鳴き声が聞こえてきます。蝶やトンボ、クモやカナヘビ、ときには木登りトカゲなどのめずらしい生きものに会えます。私は、ぼーっとして見すごした

り聞き逃したりしてしまいがちですが、キッズの4人は本当によく反応します。同じ時間をすごしているのに、なんだか少しちがうものを見たり聞いたりしているような感覚になります。もともと人が内側にもっている力なのでしょうか、それとも珊瑚舎の授業やスタッフとの対話や経験の中で培われたものなのでしょうか。とにかく、キッズの心や体が自然と反応する姿に出会うと素直にすごいなと感じ、うれしくなってしまう。最近ではアカショウビンの鳴きまねが上手にできるキッズが増え、本物そっくりの鳴き声が山がんに響きます。

味覚も初体験が多いです。キッズにすすめられて恐る恐る食べたカラキの葉は、ほんのり甘く、ついついコーヒーが飲みたくなるほどシナモンロールの香りがしました。レモンの葉やミントの香り、甘酸っぱいピタンガやアセロラの実、バンシルーやデンプなど山がんにある植物をキッズに教えてもらっています。まだ熟さない頃からその実をねらう野性味あふれるキッズの姿も微笑ましいです。

新しい発見や気づきの中で珊瑚舎の呼びかけにある「授業をつくろう」「学校をつくろう」「自分をつくろう」を日々、実感し模索する毎日です。どうぞ、よろしくお祈りします。

「古民家再生プロジェクト」

クラウドファンディング進捗報告

「珊瑚舎が学び舎として使ってきた築100年の沖縄古民家を、自分たちの手で修復したい！」と生徒の声で始まったプロジェクトです。必要な費用350万円をクラウドファンディングで集めると決めて、現在92%が集まっています。たくさんの温かい応援をありがとうございます。クラウドファンディング期間は、8月20日(日)まで！ラストスパートの応援をどうぞよろしくお祈りいたします。

▽クラウドファンディング詳細はこちら



★ ★ 事務局便り ★ ★

★大型でゆっくりとした台風6号は満潮と重なったこともあり、校舎は大きく波をかぶりしました。南城市に移ってから初めての大型台風。あらためて波の脅威を感じました。波は校舎を越え、道路側には大量の砂とゴミ。海側のモンパは葉を全て落として校舎を守ってくれました。幸い校舎内への浸水はなかったものの、雨戸も犬走の天井も砂がたまっていました。

★津波古地区では停電が続いた為に生徒達の活動が出来ず、初めて前期学習発表会「まにまに祭」を中止とせざるをえませんでした。大掃除初日は校舎を洗浄機で洗い流し、生徒達は雨戸の内側に入り込んだ砂の掻き出しや砂の押し寄せた遊歩道の砂をひたすら運んだり大変な作業でした。

★放課後遊んでいるクジラ公園も砂やゴミが押し寄せていました。噴火で流れ着いていた軽石も大量に流れており、午前中いっぱいかかって清掃をしました。きれいになった公園では、さっそく地元の天人会の方々がゲートボールに興じていました。

★山がんにではカマド小屋が倒壊。誰もいなかったので怪我人がなく何よりでした。夏休み前の3日間がんに作業では、小屋の修理や折れた樹々、散乱する小枝集めに生徒達は動いています。

★ ★ ★

●今年度(6月1日~7月31日)寄付・カンパを頂いた方々
 市野寿子大城喜春小渡律子鹿糠文子北上田登久子城間あずき当山幸江長嶺由紀子真津昭夫矢崎智章山田道子湯本貴和與儀勝子与那覇晴海尾崎せき西山哲平石田みどり竹内新仲村宮子横山真弓萩原真美照本祥敬岩月住江三枝菜美子所扶久代手塚賢至大城博三浦幸子式部恵子森口美千恵丹羽雅代家門収一上田秀一盛口佳子橋川由美子助川寿美子武田富美子辰巳万里子安里桂子安田直美下地孝法伊波雅子岸暁美城間栄順村上呂理奥本札美瀬底純子新倉美佐子安田圭太郎名嘉光夫須田恵大湾真美野村佳雄大垣千鶴後藤栄子黒川優子長谷川途子福井香代子森下浩平岡部勉宜保洋子真栄城玄真花城和子中島公公安里洋子山口剛史山里愛照屋まちこ平良次子高良勉知念敏則

発行者 : 珊瑚舎スコーレ
 事務局 遠藤知子 樋口佳子
 住所 : 〒901-1414 南城市佐敷津波古 509-4
 Tel : 098-975-7781 Fax : 098-975-7783
 Mail : info@sangosya.com
 URL : https://sangosya.com